

の持つていた活力がだんだん無くなってきているのだらうと思うのです。

一方、新しいタイプの女性の能力を切り拓かせ、いかに育むかを主眼にしている女子大がある。女性を世界に羽ばたかせて体験から学ばせ、自分たちの狭い世界の常識から脱却させるような教育を実践しています。これまで知名度のない女子大でも、そうして成功しているケースがある。将来、女子大として生き残るためには一つの流れといえるでしょう」

その好例の一つにあげるのが、大阪女学院だ。大阪城に近い文教地区にあり、緑あふれるこぢんまりとしたキャンパス。明治十七年に創設されたミッションスクール、ウキルミナ女学校を母体とする同大は、昭和四十三年に短期大学、平成十六年に四年制大学を開学した。

同校の特色は、卓越した英語教育にある。短大時代から一貫して行われてきたカリキュラムの特色を、関根秀和院長はこう語る。

「英語の語学力を十分に育てるためには、いわゆる語学教育とともに、世界観

や自然観、人間社会の事柄に対して、できるだけシャープな問題意識を持つことが大切。教養教育と語学教育の二つを統合してやろうというのが狙いです」

教養課程では、「平和の追求」「科学と宗教」「現代と人権」「生命の危機」という四つのトピックを取り上げ、「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」学習法によって、英語のコミュニケーション能力を統合的に高める。いわば「英語を学ぶ」だけでなく、「英語で学ぶ」のが特徴だ。

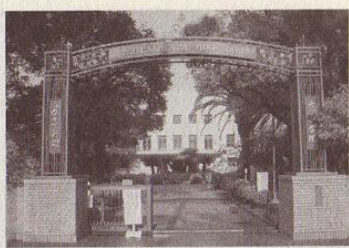
たとえば、「生命の危機」の中で、地球温暖化をテーマにしたカリキュラムでは、まず「リーディング」でテーマに関する文献を読み、森林伐採やCO₂増加などの関連情報をつかむ。さらに「ディスカッション」では、自分の意見を語り、他者の異なる意見を聞くことで、自分なりの考えをまとめ、「アカデミック・ライティング（英文作法）」で論文を書く。

それぞれを担当教員は個別にテキストを選ぶのではなく、大学独自のものを使い、一つのユニットとなって進めていく。こうしたカリキュラムを通して、実

七三)を上回っている。

さらに四年制では、三、四年次の専門教育科目はすべて英語で授業が行われ、英語力の達成目標は、修了時でTOEIC八〇〇点を設定。専門課程では、国際協力、国際マネジメント、国際コミュニケーションの三コースから選択し、国連や政府機関、NGO・NPOのスタッフから、外資系企業での国際業務、通訳、翻訳家など、進路も多岐にわたる。

卒業生からは、全米有数の医科専門大学ジョーンズ・ホプキンス医科大学付属病院に医師として勤務しつつ、同大学院で外科の勉強を続ける女性、ワシントンDCのリッツカールトンホテルでスタッフを務めた



緑あふれる大阪女学院

後、現在はオーストラリアの金融機関で働きながら大学で学ぶ女性など、エネルギーギッシユな人材が育っている。

る。

まもなく創立百二十五年を迎える同校では、ウキルミナ女学校時代から受け継がれる建学の理念がある。

「すべてにおいて、私たちが目指すことは、なんらかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をすることを誇りとして、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力のある人間を形成することです」

短大・女子大が淘汰されていくなか、同校も苦戦を強いられているのは現実。だが、今の時代にこそ、こうした理念を生かしたいと関根院長は考える。

「国際的な視野に立ち、人間として社会に貢献し、自分の豊かな人生を拓いていく女性を育てていくことが女性教育の使命でしょう」

こうした特色ある大学教育を支援する文科科学省のプログラムがある。「特色GP（グッド・プラクティス）」といわれ、応募した大学のうち、その取り組みに対して優れた教育実績が認められる大学が選ばれて、補助金によって支援される。このプログラムを文科省から受託

実践的な英語力を養うとともに、人権問題など国際的に重要なテーマを、学生は深く掘り下げて学ぶことになる。

「そうすると、内向きで快適な自分の生活の中でしか人生観を持ってなかった子が、だんだん自由になって、外の世界へ目が開かれていく。日本の社会、今の世界の中でどこにいるのかという現在位置もわかり、自分が本当にやりたいことも見えてくる。そこで僕は、『あなた方はこれから何にでもなれるんだよ』と喜んで」（関根院長）

その言葉に「えーっ？」と半信半疑でいた学生も、二年間の教養課程を経て、自分の目指す進路に向かう。短大を終えて、神戸大、京都大、奈良女子大、大阪大など国立大に編入したり、アメリカなどに留学する学生が増えている。

二年間で全授業の約六〇％が英語で行われるだけに、到達する英語力も高い。在学中に全学生が何度かTOEICを受けるが、二年次修了時には、四年制の学生の平均スコアは五七二、短大は四八六と、いずれも大学院一年の全国平均（四

し、審査を行っている「大学基準協会」の工藤潤氏に、その意図を聞く。

「今の大学教育に求められているのは、ジェネリック・スキル。つまり、コミュニケーション能力や批判的思考能力、情報化に対応したスキルなどの育成が求められているんです。国際化や科学技術の高度化などで、経済構造が複雑・多様化している時代に、そうした社会のニーズにかなった人材を大学が輩出していかなければならない。そこで教育の質をいかに高めていくかが問われているのです」

平成十五年から五ヶ年にわたって実施。第一回では、前出の大阪女学院短大も選ばれた。昨年度は三三一件の申請があり、四十八件を採択。そこで高く評価されたのが、恵泉女学園大学という女子大が独自のカリキュラムで実践する「体験学習」の取り組みである。

特色GPで高評価の「FS」

東京・多摩市にある恵泉女学園大学は、「聖書」「国際」「園芸」の三本柱を教育理念とする。自然豊かなキャンパス



東南アジアの現場で逞しく学ぶ女子学生たち

内には有機農法の農場があり、生活園芸は必修科目。春にはジャガイモ、キュウリ、サツマイモ、秋には大根、白菜などを栽培し、学生たちは土や虫に触れ、畑を耕して、自分の手で育てた花や野菜を収穫する喜びを体験する。

さらに、特色GPで注目されたのが、長期・短期で行う「フィールドスタディ(FS)」だ。長期FSは、約五ヶ月間、タイ北部などに滞在するプログラム。国立チエンマイ大学でタイの社会や開発に

の志願状況は、入学定員四一〇人に対して、志願者数約四千人。入学者は五五八名で、前年比約二八%と、予想を上回る増加だった。

昨春秋には、ビジネス誌『プレジデント』が、全国・女子大学の卒業生の平均年収・給料偏差値のランキングを発表。就職にも有利な「お買い得度(入学偏差値と就職後の平均年収による年収偏差値の差の大きさ)」では、恵泉が堂々の一位に。女子大淘汰の時代にあっても、木村学長は静観する。

「新しい多様な価値観の中で、豊かな個性あふれる人間を教育していくという理念は重要さを増し、ますます注目されていくというのが僕の考えです。全入化、共学化の波も、恐るるに足らずと」

厳しい状況とはいえ、独自の特色を打ち出し、学生を惹きつける女子大は生き残っている。そこで問われる女子大の魅力とは何か。前出の関西国際大学の濱名学長はこう語る。

「それは『女子教育の機関』としての魅力だと思っただけ。アメリカには『セ

ついて学びながら、環境、民族、人権問題などさまざまな分野で活躍する現地NGOで体験学習をする。現地ではタイ語の集中トレーニングや山岳民族の村でホームステイも体験し、各自でテーマを決める。有機農業やストーリーテリング、エイズ問題、セクシャルマイノリティーの人権など、関心は深く、終了後にレポートをまとめる。

HIV/AIDSの蔓延を防ぐための性教育に関心をもち、若者グループのトレーニングに参加した学生。子どもの人身売買被害者と生活した学生は、「子どもたちが輪になって話しをしているとき、ふらつと離れた場所へ行き涙を流す子どもがいた。私がどうしたのかと聞く」と『家に帰りたい』と言っていた。そんなとき、彼女を抱きしめてあげることしかできない無力な自分と『どうして彼女がこのような思いをしなければならぬのか』という疑問が頭の中を交錯していた。……』と綴る。

また、短期FSは、バングラデシユ、タイ、沖縄、ドイツ、ニュージーラン

ドン・シスターズ』といわれる有名な大学群があります。アメリカでも一時、女子大離れという厳しい現象があったが、そうした有名大学は今でも立派にサバイブしている。それは『女性のリーダーを育てていく』という理念や理想、目的を持ち続けたからです」

日本の女子大においても、いわば「女子教育」でなければ育てられない人材をどう育成していくか、ということがポイント。そのためには、新しい時代に合った教育内容をどれだけ開発していくのかにかかっている、と濱名氏は指摘する。

「たとえば、政財界だけでなく、様々な分野でリーダーとして活躍するような人材を育てる大学があってもいい。教える側も、教えられる側も、具体的な目的意識がない状態の中で、女子大として漫然とやっていける時代ではなくなってきた。さらに、具体的な学習成果として、学生にどのような能力が身に付くのかという『ラーニング・アウトカム』もきちんと説明できなければいけない。そうしたことのできなければ、女子大とし

ド、フランスなどで一〜二週間の研究旅行を行う。いずれも、NGOやJICAなど海外体験のある教師陣や現地スタッフとの連携で実施される。現地の事情や不慮の事態に対応するリスク・マネジメントも確立され、学部学生の四〇%以上が学生が参加している。

こうした取り組みに共通するのは、「異文化理解」というテーマだ。そこには創立者・河井道の理念に支えられた教育があると、木村利人学長はいう。

「キリスト教によって、愛と奉仕を学び、国際によって、平和と協力を学び、園芸によって、命と自然を慈しむ。そうした教育理念が、今はますます新しいのです」

昨年四月に学長に就任した木村氏は、タイ、ベトナム、スイス、アメリカなどの大学で、三十年にわたり教授を歴任。世界の大学教育にふれた経験を通して、「恵泉は世界で稀に見るユニークな大学。聖書、国際、園芸という三つの柱を統合した人間教育をやっている大学は世界に例をみない」と確信する。

女子大が軒並み苦戦する中で、今年度

での魅力をアピールできないでしょう」
大学全入時代といわれるなか、受験を控えた女子生徒たちはどう見ているのか。私にも高校生の娘がいるが、その選択は難しくなっているように感じる。人氣校の倍率は上がり、よりシビアな競争を強いられる。一方、中堅私大、女子大などでは、国際文化、コミュニケーション学科などの新設が相次ぐが、その特色は外から見えない。それゆえ迷える子どもたちのために、より魅力ある教育を示してほしいと願う。

これまでのように偏差値や入人数だけで大学を選び、苦労して入っても、ただ漫然と大学生活を送るような時代はいずれ終わりを告げるのではないか。そこで何を学び、何を得られるのか。大学はそれを子どもや保護者に分かりやすく説明できなければいけない。ここに紹介した女子大群は、独自の個性を発揮し、学生に何を教え授け、どういう女性を育てようとしているのか、明確な目標とヴィジョンをもっていることだけは間違いない。

(うたしろ ゆきこ)